【解題】

シュネシオスと夢解釈

土橋茂樹

著者ブロンウェン・ニール博士は、オーストラリア・カトリック大学・上級講師および同大学・初期キリスト教研究所の副所長を兼務し、国内外の学会要職にも就いておられる新進気鋭の教父研究者である。大グレゴリオスを筆頭に東西教父に精通し、多方面にわたる膨大な研究業績については、ウェブサイト（http://www.cecs.acu.edu.au/pdf/bronwenneilpublications.pdf）をご覧いただきたい。

本誌への寄稿論文は、これまでニール博士が研究してこられた研究領域とは異なる、その意味では博士自身にとっても少なからず挑戦的な論稿であると同時に、我が国においても、おそらくこれまでほとんど考察されることのなかったキュレネのシュネシオスを扱っている点で、極めて興味深いものと言えよう。シュネシオスとその諸著作に関しては、簡潔にして的を射た紹介が本論中にあるのでそちらに譲るとして、本解題では背景的な情報を若干補うだけにとどめたい。その上で、本論の中心的テキストであるシュネシオス『夢について』の読解上の要所とも言い得る箇所について、本論とは異なる解釈の可能性を提示したい。そうすることによって本論の理解をより一層深める一助となれば幸いである。

1．キュレーネー

シュネシオスの出身地である「キュレナイカ」（イタリ

ア語綴りで読むと「キレナイカ」は、本論註3にもあるように、現リビア北部の東岸地域の名称であり、ギリシア名は「キュレーネー」(Κυρήνη)である。おそらく、キュレーネーという名でもっともよく知られているのは、哲学史上、小ソクラテス学派に帰されるキュレネ派(οἱ Κυρηναϊκοί)であろう。彼らは、キュレーネーのアリスティッポスを創始者とし、過激な快楽主義を奉じたことで知られている。

2. アリストテレスの夢理論と夢占い

本論註7でも触れられているように、シュネシオスの夢解釈はアリストテレスの夢理論に多くを負っている。もっとも典型的な箇所は以下である。

> さて、表象〔活動〕(φαντασία)については、『魂について』で議論された。すなわち、魂の表象する部分(τὸ φανταστικόν)は感覚する部分と同じであるが、表象する部分であること〔つまりその本質〕と感覚する部分であること〔その本質〕は異なる。また、表象〔活動〕は、現実に活動している感覚によって生み出された運動であり、夢は何らか表象された事柄(φάντασμα)であるように思われる。なぜなら、我々が夢(ἐνύπνιον)と呼ぶのは、それが単純な仕方であれ何か特定の仕方であれ、眠りの内で(ἐν ὕπνῳ)表象された事柄(φάντασμα)のことだからである。したがって、夢を見ることは、魂の感覚する部分の働きであるが、もっぱら表象能力によって感覚する部分にそれが属することは明らかである。(Aristotle, *de somniis* (ΠΕΡΙ ΕΝΥΠΝΙΩΝ) 459a14-22)

ここで、表象〔活動〕(φαντασία)の一般的な英訳は'imagination'であり、本論においても一貫してimaginationが用いられている関係で、本論和訳では「表象(力)」ではなく「想像力」がその訳語として採用されている。したがって、本論のキーワードの一つである「想像力」は、アリストテレスのφαντασίαに由来する概念であるということを念頭に置いておかれるとよいだろう。

次いで、シュネシオスの夢予言に関する考えを理解し易くするために、アリストテレスの「夢占い」論のポイント

を見ておきたい。

一般的に言って、人間以外の動物にも夢を見るものがいる以上、夢は神によって送られてくるものでもなければ、そのこと〔神から言葉が送られること、すなわち預言〕が夢見の目的でもない。むしろ、夢はダイモーンな〔神霊的な〕ものである。なぜなら、夢の自然本性はダイモーン的であって、神的ではないからである。その証拠はこうだ。すなわち、まったく普通の人たちが予言の力をもち、鮮明な夢を見る。そうした夢は、それが神によって送られてきたものではなく、自然本性がいわば饒舌で黒胆汁質な人たちがあらゆる種類の視覚内容を〔夢として〕見たものなのである。(Aristotle, *On prophecy in Sleep*, 463b12-18)

以上のアリストテレスの考えを背景にシュネシオスの夢理論の最大の特徴を挙げるとすると、アリストテレスにとっては感覚と理性、あるいは可感的対象と可知的対象とを媒介する魂の能力／活動でありその対象であった表象が、シュネシオスにおいては、同様に魂と身体の融合する領域で働く表象力＝想像力でありながら、それがプネウマという、それ自体は「気息」という物質でありながら魂が物質＝身体の中に入ることを可能にする霊的なものと捉えられている点である。言い換えれば、プロティノスにおいては、知性界と感性界（物質世界）を媒介するものは、それ自体が心的でありながら「両棲類」とも喩えられる魂であったが、シュネシオスにおいては、それら二つの領域を媒介するものがあくまでプネウマという物質の振る舞いに還元されつつ、それを想像力の働きとして記述する点に彼の際立った特徴がある。もしそうであるとすれば、ではそのプネウマ＝想像力とは一体何であるのか。ニール博士は、本論においては、フィッツジェラルドの翻訳に従って想像力を「プネウマの一種の被膜（envelope）」あるいは魂の「星気体（霊体）」（astral body）とみなし、プネウマを「霊的被膜」（spirit-envelope）と解している。しかし、この解釈は果たしてシュネシオスのテキストの読みとして妥当であろうか。以下でその点について若干の反論を試みてみたい。

3．シュネシオスにとってプネウマとは何か

取り上げたいテキストは以下である。

> ἐπαΐειν γὰρ τὸ πνεῦμα τοῦτο τῆς ψυχικῆς διαθέσεως, καὶ οὐκ ἀσύμπαθές ἐστι καθ᾽αὐτό, καθάπερ τὸ ὀστρεώδες περίβλημα. ἐκεῖνο μὲν γὰρ καὶ ἀντίθεσιν ἔχει πρὸς τὰς ἀμείνους τῆς ψυχῆς διαθέσεις.（『夢について』VI: 136d-137a）

ニール博士が忠実にパラフレーズしたフィッツジェラルド訳によれば、前掲の文章は、「プネウマとは、物質の内に魂が入り込むことを可能にするある種の被膜（coating）である」となり、プネウマが霊的被膜であるという前述の解釈に繋がるわけである。しかし、前掲の版のギリシア語テキストを読む限り、その読みは疑わしい。フィッツジェラルド解釈との相違を際立たせるために直訳すると以下のように訳すことが可能であろう。すなわち、

実際、そのようなプネウマは、魂の性向に触れている。その時プネウマは、固い貝殻状の覆い（τὸ ὀστρεώδες περίβλημα）のように、もはやそれ自体として何も感受し得ないものではない。なぜなら、そのような固い覆いは魂のより優った性向に対立するものだからである。

もし拙訳が正しいとすれば、フィッツジェラルドやニール博士は、プネウマを被膜・覆い（coating, covering, περίβλημα）と同一視している点で誤訳していると言わざるを得ない。まして、この引用文において、「固い貝殻状の覆い」は物質性に自閉している身体の様態を表現しているのであって、その限りでプネウマのように魂の性向に触れることは決してあり得ないと断言されているのである。確かにフィッツジェラルドの言うところのプネウマもまた、魂と物質＝身体を融合する機能をもったものと解されるが、少なくとも彼がその解釈のテキスト上の支持として挙げる上述の箇所では、プネウマは決して「被膜」（envelope, coating）と表現されてはいない。

この点については、ニール博士が来日した際に行われたセミナーにおいても集中的に議論されたが、シュネシオス

のテキスト自体がどちらかといえば明確な概念規定よりも多様な修辞に流される傾向があり、当該箇所だけで判断せず『夢について』全体として見た場合、俄に決着が着くような問題ではないという点で合意が得られた。その意味では、本論をきっかけとして、シュネシオスの夢理論やプネウマ論に対する関心が今後ますます深まることが切に望まれる。ニール博士の論稿は、その点、膨大な文献をサーベイした極めて見通しのよい労作であり、五世紀アレクサンドリアの当時の切迫した宗教的、思想的、社会的状況にあって、新プラトン主義やギリシア的宗教とキリスト教との間での現実的な葛藤のただ中で深遠な思索を模索し続けたシュネシオスの息遣いまでをも私たちに伝えてくれる力作と言ってよいだろう。

（中央大学文学部教授）